

第33回 国際助産師連盟 (ICM) 学術集会参加報告

水野 真希・高山 奈美・那須野 順子*

Report of the 33th International Confederation of Midwives Triennial Congress in Bali

Maki MIZUNO, Nami TAKAYAMA, Jyunko NASUNO*

抄録

第33回 ICM (International Confederation of Midwives) 学術集会がインドネシアのバリ島にあるバリ国際コンベンションセンターで開催された。この大会は国際助産師連盟 (ICM) が主催となっており、母親と新生児へのケアという共通の目標を達成するために、世界中の助産師と助産師の専門職団体が構成された非政府組織である。今回は Covid-19による感染拡大の影響で2017年以来6年ぶりに参列形式での開催となり、130か国から2,600名以上の助産師が参加した。「Social background of women giving birth that are unintended pregnancies and subsequent maternal and child outcomes in Japan」というテーマでポスター発表を行った。日本での避妊率の低さ、乏しい性教育の実態や様々な場面で女性の意思決定が認められていない点など多くの課題を様々な国の研究者や臨床で働く助産師と一緒に議論することができ貴重な機会を得た。

キーワード：助産師、国際助産師連盟、国際学会

Key words：Midwifery, International Confederation of Midwives (ICM), International congress

I. はじめに

2023年6月11日から14日までの4日間、3年に一度開催される第33回 ICM (International Confederation of Midwives) 学術集会がインドネシアのバリ島にあるバリ国際コンベンションセンターで開催された。今回は Covid-19による感染拡大の影響で2017年以来6年ぶりに参列形式での開催となり、130か国から2600名以上の助産師が参加した。本学から、研究発表も兼ねて看護学部母性看護学領域の教員であり助産師でもある高山、那須野、水野の3名が参加したので報告していく。

II. ICM (International Confederation of Midwives) の概要

国際助産師連盟 (ICM) は、母親と新生児へのケアという共通の目標を達成するために、世界中の助産師と助産師の専門職団体が構成された非政府組織である。ICM は、WHO、UNFPA、その他の国連機関や、国際婦人科産科連盟 (FIGO)、国際小児科学会 (IPA)、国際看護師協議会 (ICN)、非政府組織を含む世界的な専門医療機関と緊密に連携している。

助産師教育の発展や発展途上国での助産師活動の支援、助産技術の向上、労働環境の改善に向けた政府への働きかけなど、世界中の助産師の専門職団体の取り組みを支援している。

*駒沢女子大学 看護学部 看護学科

現在、139か国、118の団体が加盟しており、日本からは、3団体（日本助産師会、日本看護協会、日本助産学会）が加盟している。

1954年にベルギーで国際助産師連盟（ICU）の前身である、国際助産師連合（IMU）が設立され、1999年にICMと名称変更、本部がオランダのハーグに移転して以降は同地を本部拠点としながら活動している。

Ⅲ. 第33回 ICM 学術集会（33th International Confederation of Midwives Triennial Congress）の概要

大会テーマを“Together again : from evidence to reality”と掲げ、基調講演やシンポジウム、研究発表、ワークショップなど125セッション、ポスター4セッションなどが企画されていた。大会前から女性をエンパワメントするためのダンスを踊り、パレードも開催された。今回は、Covid-19の感染拡大が助産ケアや教育に大きな影響を及ぼしたことが世界各国から報告されていた。地域がロックダウンされ、助産師の活動が制限され妊婦が孤立した例や出産方法の変更、夫やパートナーへの支援の制限、虐待やDVの増加などが報告された。また、教育においても実習が制限され、オンライン学習が主流となり十分な学習が得られなかったことが報告された。その一方で、助産のリソースが限られている地域に効果的な救急医療を提供するためのリモートでの助産ケアプログラムの開発やオンラインによるシミュレーション教育

の開発、オンラインによる交換留学の紹介なども行われ、世界各国で、Covid-19を契機としてデジタル化がケアや教育場面でも急速に進んでいることが示された。WHOのセッションでは、多くの国で感染症と敗血漿が原因で新生児や妊産婦の死亡につながっていることを報告しており、周産期における感染予防や感染管理に向けた助産師の役割について議論が行われた。

Ⅳ. 戦時下での助産ケアの実態

大会の中で、一番印象的なセッションについて紹介する。大会2日目に「人道的で脆弱な環境における助産師の役割の探求」というテーマでウクライナ人とハイチの助産師が戦時中の自国での助産ケア体験を報告し、その後、戦争や自然災害など脆弱な環境の中でセクシュアル・リプロダクティブヘルスサービスを提供する際に助産師が直面する課題について議論が行われた。

ウクライナ人助産師のVira Tselykさんは、シェルターの中に避難をしてきた妊産褥婦へのケア経験を、時々言葉を詰まらせ、涙も見せながら語っていた。会場の人々も、私自身も涙を流しながら静かにViraさんの話に耳を傾けていた。Viraさんは、自分の家族の安否を気にしながらも、“We had to save the lives of pregnant women and women in labour, and we had to go down to the bomb shelter. That was the worst experience in my 30 years of being a midwife.”（私たちは妊婦と出産中の女性の命を救うために、



写真1



写真2

シェルターに行かなければならなかった。それは、私の30年間の助産師生活の中で最悪な経験だった」と話し始めた。

空爆への恐怖、氷点下11～12度という凍える寒さ、限られた食物、そして医療器具や医薬品、そして医療スタッフが不足している中で、女性とその赤ちゃんをケアすることの大変さ、難しさを語っていた。このような状況下でも、助産師たちを前に向かわせたことは、42日間で136人の赤ちゃんがシェルターで生まれたことだった。“When I heard those babies crying, it was louder than every shell for those days and the most powerful of songs. This cry was something that helped us stand up and keep doing what we were doing. It was the light of hope.”（赤ちゃんが泣いているのを聞いたとき、それは当時のすべての爆弾の音よりも大きく、最もパワフルな歌でした。この泣き声は、私たちを立ち上がらせ、私たちが行っていることを継続していく助けとなりました。それは希望の光でした。）と言われ、会場からは大きな拍手とスタンディングオベーションをもたらしていた。また、紛争下での支援活動に関するワークショップでは、ウクライナでの助産師の勤務環境と紛争下での地域で暮らす妊産婦への支援活動について報告があった。ウクライナでは助産師の社会的地位や知名度は低く、賃

金も安い。また、戦前の医療産科制度では、助産師による自宅や助産院での助産ケアは提供できず、病院に勤務し医師のもとで助産活動を行っている現状がある。戦時中では、病院も破壊され妊婦が孤立し十分な支援を受けられない状況から、助産師や医師など産科医療スタッフによるSNSを活用した支援プログラムを立ち上げ、女性に電話やSNSを利用して保健指導の提供や家族や救命スタッフへの出産指導など助産師が主体となって活動していることが報告された。

人道的緊急事態においては、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルスとライツが軽視されてしまうこと、不測の事態への備えと復興における助産師の重要性を考えさせられた。また、このような事態の中では、助産師は最前線で女性へ支援を行う役割があることから、平時から不測な出来事への関与を予測し、支援の在り方を検討する必要性があることも学んだ。また、日本でも法的な制約により、避妊薬などの処方箋が交付できないことや、あらゆる医療行為が医師管理下で提供が必要とされている点など助産活動が妨げられている現状はあることから、様々な緊急事態に助産師の意思決定が尊重され、自律して活動できるよう法整備の必要性も認識することができた。

V. 学会発表について

今回は、「Social background of women giving birth that are unintended pregnancies and subsequent maternal and child outcomes in

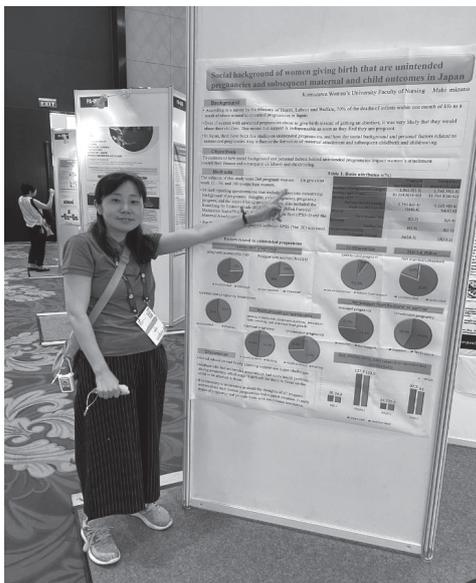


写真3



写真4

Japan」というテーマでポスター発表を行った。
このテーマは日本の意図しない妊娠の実態を調査したものである。日本での避妊率の低さ、乏しい性教育の実態や様々な場面で女性の意思決定が認められていない点など多くの課題を参加者と一緒に議論することができ貴重な機会を得た。

Ⅵ. 最後に

学会に参加し、それぞれの国の情勢は異なるが、女性や母子と家族へ支援するという助産師のミッションは共通していることから、助産ケアにおける課題や教育の向上に向けた取り組みなどそれぞれの助産師が交流し情報を共有することができたことは、大変貴重な機会であった。Covid-19の影響もあり、前回の大会より参加者は2～3割ほど少なく日本からの参加者も少ない状況ではあったが、オンラインではなく対面による大会は、会場の盛り上がりを感じることができ、時間を気にせず情報交換や議論ができ有意義な時間となった。日本の助産師の役割や教育の在り方を考える上で、国際会議に出席することは、様々な国の助産師や研究者たちと交流することができ、広い視野で多方面から問題を明確化し対応策を考えることができるため、今後も積極的に参加し視野を広めたいと思う。

文献

ICM (International Confederation of Midwives) ホームページ:

The International Confederation of Midwives supports midwives

(internationalmidwives.org). (検索日: 2023.9.13)

33rd ICM Triennial Congress Bali, Indonesia
ホームページ,

<http://www.midwives2023.org> . (検索日: 2023.9.13)